

特集 支配者たらしむるもの

中世盛期フランドル伯家の領邦統治と聖遺物崇敬

1070年アスノン修道院の奉献式

上山益己

はじめに

中世盛期フランス王国において、王権とならんで重要な役割を果たしたのが諸侯家系である。彼らは王国の各地方に割拠し、王権と伍しながら王国内外の政治・軍事に強い影響を及ぼした⁽¹⁾。しかしこれまで行われてきた制度史的な研究では、現存する史料の乏しさという制約もあり、諸侯権力のあり様は十分に解明されてこなかった。

そこで本稿では儀礼という側面から諸侯権力を考察する。儀礼と権力との関係は、政治文化研究という観点の導入にともなって、1980～90年代頃から歴史学で盛んに取り上げられるテーマの一つとなった。こうした研究の手法はもともと、C・ギアツやV・ターナーなど人類学者らによって取り組まれてきたものであり、儀礼的な場で権力が自らをどう表象し、社会に伝えているかという問題が、当該社会において権力関係がどのように構築されるのかを考察する上で重視されるようになった。フランドルを含む中世フランス王国の領域では、王権について多くの研究がなされている。そこでは、聖別式や葬儀、入市式といった、広く公衆の目に触れるきわめて公開性の高い儀礼において、王権の表象が行われていたことなどが考察されてい

(1) ノルマン・コンクエストや第一回十字軍を例に挙げれば充分だろう。

(2) C. Geertz, *The Interpretation of Cultures: selected essays*, New York, 1973 (C・ギアツ、吉田禎吾他訳『文化の解釈学』岩波書店、1987年)；id., *Negara: the Theatre State in Nineteenth-century Bali*, Princeton, 1980 (C・ギアツ、小泉潤二訳『ヌガラ——19世紀バリの劇場国家』みすず書房、1990年)；V. W. Turner, *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*, London, 1969 (V・W・ターナー『儀礼の過程』富倉光雄訳、思索社、1976年)；id., *Dramas, Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*, Ithaca, 1974 (同『象徴と社会』梶原景昭訳、紀伊国屋書店、1981年) など。

(3) する。しかし中世盛期の諸侯家系について取り上げたものは、12世紀後半からプランタジユネ領内で散見されるようになる即位儀礼を考察したH・ホフマンの研究がある程度にすぎない。⁽⁴⁾ 中世盛期フランスの諸侯家系が行使した影響力を考えると、その重要性に比して研究は進んでいないといえよう。

こうした研究状況にあって、本論ではフランドル伯家を取り上げる。これは、9世紀末からフランス王国の北東端に勢力を伸ばし始め、10世紀中頃には自立的な勢力圏を確立して割拠した諸侯家系である。近隣の諸侯や皇帝ともたびたび矛を交え、帝国側にも勢力を拡大した。11世紀中頃には幼いフランス王の後見役を務めるなど、きわめて活発な政治的・軍事的活動を行っている。⁽⁵⁾ その権力のあり方の考察は、中世盛期北フランスにおける地域の政治・権力の全容を考えていく上できわめて重要である。

このフランドル伯家については、平和令集会や教会施設の奉獻式などにおいて、しばしば「聖遺物を集めた」ことが知られている。E・ボゾキーが9～11世紀の同伯家の教会政策を扱った論文でこれを取り上げているが、⁽⁶⁾ いたって概略的であり、「聖遺物はその土地の加護や豊潤の概念と結び付いていた」ことなどを全体として論じているものの、個々の事例についての細かな分析や考察は行われていない。どこからどれ程の聖遺物を集めたのか、その規模さえ必ずしも言及されておらず、また「儀礼」という側面からの考察も充分ではない。

ボゾキーの研究がきわめて概略的なものにとどまったのは、残存する史料の多くに具体的な

(3) 王権の聖別式や入市式は従来から研究されていた（例えば、E. H. Kantorowicz, *The King's Two Bodies: A Study in Mediaeval Political Theology*, Princeton, 1957 や B. Guenée et F. Lehoux, *Les entrées royales françaises de 1328 à 1515*, Paris, 1968 など）が、80～90年代以後、政治文化的な観点からより盛んに取り上げられることになった。1987年にはR・E・ギーゼイが近世まで視野に入れて前近代フランス王権儀礼の分類を試みている。R. E. Giesey, 'The King imagined', in *The French Revolution and the Creation of Modern Political Culture, vol.1: The Political Culture of the Old Regime*, ed. K. M. Baker, Oxford, 1987, pp.41-59. ギーゼイの議論に対する批判としては、二宮宏之「王の儀礼——フランス絶対王政」『世界史への問い7 権威と権力』岩波書店、1990年；石井三記「ヨーロッパの王権儀礼——フランス宮廷」『天皇と王権を考える5 王権と儀礼』岩波書店、2002年がある。王権儀礼の分類についての議論にはここでは立ち入らないが、これらの論考では、「国家儀礼」と分類される聖別式や入市式のような公開性の高い儀礼が中世から行われており、それと比べて秘匿性の高い「宮廷儀礼」は近世以後になってから発達したことが指摘されている。

(4) H. Hoffmann, 'Französische Fürstenweihen des Hochmittelalters', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters*, 18, 1962, pp.92-119. なお、中世末期については、フランス王家の傍系であるブルゴーニュ公の入市式などが近年研究されている。E. Lecuppre-Desjardin, *La ville des cérémonies: Essai sur la communication politique dans les anciens Pays-Bas bourguignons*, Turnhout, 2004；J. Hurlbut, 'Symbols for Authority: Inaugural Ceremonies for Charles the Bold', in *Staging the Court of Burgundy*, ed. Wim Blockmans et al., London/Turnhout, 2013, pp.105-112；河原温「ブルゴーニュ公シャルル・ル・メレールの1474年ディジョン入市式について」『人文学報』490号、2014年、1-14頁など。

(5) David M. Nicholas, *Medieval Flanders*, London/New York, 1992.

(6) E. Bozoky, 'La politique des reliques des premiers comtes de Flandre', dans *Les reliques: objets, cultes, symboles. Actes du colloque international de l'Université du Littoral-Côte d'Opale (Boulogne-sur-Mer), 4-6 septembre 1997*, éd. E. Bozoky et A.-M. Helvétius, Turnhout, 1999, pp.271-292.

情報が欠けていること⁽⁷⁾に由来しているが、こうしたなか、例外的に関連史料が多く残されているのが、1070年のアスノンの事例である。しかもこの事例に関しては、「伯領全体から」聖遺物を集めたことが明記されており、かなり大規模なものであったことが推察される。本論ではこの数少ない手がかりであるアスノンの奉献式を材料として、類似の事例も考慮に入れながら、フランドル伯家が自らの権威をどのように見せようとしていたのかを明らかにする。そしてそこから、中世盛期フランスで王権とならんで領域的な支配を担っていた、諸侯家系による権力の表象のあり方を考察したい。

1 アスノン修道院と史料

アスノンは、中世盛期当時、フランス王国内のフランドル伯領としては南端に位置し、ここより数 km 南方のヴァランシエンヌは、もう神聖ローマ帝国側のエノー伯領であった。この地に7世紀後半に建てられたのが、アスノン修道院である。しかし7～10世紀のアスノン修道院についてはほとんど分かっていない。細かな経緯は不明だが、ノルマン人の侵入による荒廃の後、この施設は修道士からも放棄され、少数の参事会員だけが留まっているという状態になっていたようだ⁽⁸⁾。すっかり荒廃していたこの施設を11世紀に再建したのが、フランドル伯ボードワン・ド・モンズ(位1067～70年)である。父ボードワン・ド・リールの相対的な長命によって、伯位に就く以前から政治・軍事に携わっていた彼は、1065年にアスノン修道院の修復を開始し、留まっていた参事会員を退去させる。代わりにサンタマン＝レゾー修道院からロドランドゥスを指導者として招き、修道院としてこれを再開した。

このロドランドゥスの命により書かれたのが、同修道院の公式の歴史書といえる『アスノン修道院史』である。その著者トメルスもまた、もとはサンタマン＝レゾーの修道士であったよう⁽⁹⁾だ。その執筆は奉献式からまもなく開始されたらしい⁽¹⁰⁾。ロドランドゥスの命は、「いにしえのアスノン修道院の建設(の経緯)を新たな形で記し... 神のおぼえめでたき辺境伯ボードワンが... この地でどれほどの善行に心を砕いたかを記す⁽¹¹⁾」というものであったが、先述した⁽¹²⁾

(7) 1024年にアラスとカンブレ間の某所で行われた平和令集会や、1030年のカンブレ聖堂の奉献式などで複数⁽⁹⁾の聖遺物が集められたと伝えられているが、それらを記した史料は、単に複数形の聖遺物(sanctorum corpora, sanctorum reliquiae)や多くの聖遺物(multa sanctorum corpora)がそこに集められたと書いているだけで、それ以上の細かな情報をほとんど伝えていない。Ibid., pp.279-282.

(8) *Gesta episcoporum Cameracensium, lib.II, MGH, SS, tom.7, p.460*; Tomellus, *Tomelli Historia Monasterii Hasnoniensis, MGH, SS, tom.14, p.152*. 17世紀の歴史家ブラスールは、恐らくは現存しない「写本210」を挙げて、デーレン人がアスノンを襲ったと記している。Ph. Brasseur, *Origines omnium Hannoniae coenobiorum octo libris breuiter digestae*, Mons, 1650, p.34.

(9) *Tomelli Historia*, pp.147-158; Tomellus monachus Hasnoniensis, *Historia Hasnoniensis Monasterii, PL, tom.147, cols.,585-600*.

(10) *Catalogus Abatum S. Amandi Elnonensis Uberior, MGH, SS, tom.13, p.387*.

(11) *Tomelli Historia*, pp.147-149; *Historia Hasnoniensis*, cols.585-588.

(12) *Tomelli Historia*, p.149; *Historia Hasnoniensis*, col.587.

ように、創建後数世紀の情報はいたって乏しく、実際の内容としては、ボードワン・ド・モンによる再建の経緯がその大半を占めている。

この公式の歴史書以外に、二つの史料がアスノン修道院の奉献式についてまとまった記述を残している。一つは、『ブルッへの聖ドナティアヌスの奇跡について』と便宜的に題されたものである⁽¹³⁾。この匿名の著者により書かれた断片的な史料は、同じフランドル伯領内の別の都市、ブルッへのシント＝ドナース教会の聖堂参事会長ライネリウスに献呈されており、彼が聖堂参事会長だった1080年から1089年の間に作成されたと考えられている。彼はアスノンの奉献式にも参加していたようであり、この史料の内容は、ライネリウス自身が語ったものである可能性も指摘されている⁽¹⁴⁾。

もう一つは、アスノン修道院に所蔵されていた『シジュベール・ド・ジャンブルーの年代記』への加筆である⁽¹⁵⁾。これは、もともとはその題の通りジャンブルー修道院の修道士シジュベールによって書かれたものだが、各地の修道院でそれぞれに書写・加筆された。このアスノン版の『年代記』も、アスノンの修道士が、いくつかの修道院ですでに筆が加えられていた『シジュベールの年代記』を写し、さらに独自の加筆を行ったものである。正確な時期は不明なものの、1167年以後、そう経たない時期までにはすべての加筆が完了したと考えられている。式が行われた1070年からいささか時期を経て書き込まれた可能性があるが、アスノン修道院の奉献式に関する加筆は記述が簡潔な割に情報量がたいへんに多く細かで、トメルスが書き残した以上のものを含んでいることから、トメルスの著作以外の何らかの記録を写した可能性が高いと考えられる⁽¹⁶⁾。これら三つを本稿で取り上げる主たる史料とする。

2 アスノン修道院再建の経緯

まず、アスノン修道院の再建にいたる経緯を確認しておこう。これはもっぱら『アスノン修道院史』が伝えており、その概略は次のようなものであった。再建者であるボードワンは若い頃からその才能と美德により秀でた人物であったが、青年期に重い病に陥ることになる。死の床に伏すボードワンに聖ペトルスと聖マルセリヌスの幻視⁽¹⁷⁾が訪れ、二人の聖人は、「アスノン修道院を再建すれば病は治る」と告げ、さらに「同地の城を本拠地として周囲を苦しめているウィンテリクスという悪徳の者を同地から排除するよう」要請した。ボードワンが同意すると病は快癒したが、彼は幻視のことを忘れてそれらを実行しなかった。成年したボードワンは、

(13) *Ex Miraculis S. Donatiani Brugensibus*, MGH, SS, tom.15, pars II, pp.854-858. 全文は、AASS, oct., tom.6, 1853, pp.504-506.

(14) *Ex Miraculis S. Donatiani*, pp.856-857.

(15) *Auctarium Hasnoniense*, MGH, SS, tom.6, pp.441-442. *Sigeberti Gemblacensis Chronographia* の解説は、*ibid.*, pp.268-299. *Auctarium Hasnoniense* については、*ibid.*, pp.279-281, p.441。

(16) 修復が完了した年（1069年）や暦などが細かく書かれている。

(17) 両聖人の聖遺物は再建前からアスノンに置かれていた。*Gesta episcoporum Cameracensium*, p.460. なお、この聖ペトルスは、いわゆる使徒ペテロとは別人である。

ある戦闘で手傷を負い、ふたたび療養の床につくことになるが、この時、かつての幻視を思い出してついにそれらの実行を決意する。まずウィンテリクスを呼び出し、他の領地と交換することで、彼をアスノンから遠ざけようとした。しかしウィンテリクスが拒否したので、ボードワンは軍を動かして城を奪取しようとするが、これも失敗に終わる。なかなか誓いを実現できないボードワンは、「啓示により示されたことを実現させてくださいますように」と神に祈った。すると、「神の怒りの剣はウィンテリクスの頭上に向かって抜かれ」、まもなくウィンテリクスは配下の戦士と諍いを起こして殺害されてしまう。ボードワンはこの機を逃さずアスノン城を占拠して破壊した。そしてアスノン修道院の再建に着手し、これを成し遂げるのである。

このように、『アスノン修道院史』に書かれた同修道院再建の経緯に、サンタマン＝レゾー修道院や再建後の初代アスノン修道院長ロドランドウスはまったく出てこない。完全にフランドル伯単独の事業として描かれている。しかもその動機はきわめて個人的なものだ。⁽¹⁸⁾この再建譚は、直接的にはアスノン修道院長の指示により書かれているのだが、実質的なその内容には、むしろフランドル伯家の意向が強く働いていたと考えられよう。トメルスが、「(かつて)彼(ボードワン・ド・モンズ)は、私を従者として自らの横に置いていた」と自らと伯の関係について記している⁽¹⁹⁾ことからしても、伯自身か伯周辺から聞き取ったことをほぼそのまま書き取った可能性もある。実際、アスノン修道院の再建に関連して発給されたボードワン・ド・モンズの証書の中では、彼自身が自らの幻視に言及している。⁽²⁰⁾

そのうえで注目に値するのは、アスノン修道院再建にあたって、ボードワン・ド・モンズとアスノン城主の間で戦闘になったことが記されている点である。『アスノン修道院史』はその理由として、「ウィンテリクスは悪人であるから排除せよ」と聖人に言われたからと描いているだけで、この城主との戦闘に陥る現実的な経緯を記していない。「アスノン城主が周囲を苦しめている」と聖人の口を借りて非難していることから、アスノン城主が頻繁にフェーデを⁽²¹⁾起こしていた可能性が考えられる。また「領地を交換しようと交渉したが拒否された」との記述もあるので、伯が何らかの事情でアスノン城主の封土を別の場所と交換しようとし、それを拒否されたことから両者が対立したとも考えられる。しかしいずれにせよ、伯と城主との間に

(18) フランドル伯家はボードワン・ル・バルビュの頃から、サン＝ヴァ修道院長リシャール・ド・サン＝ヴァンヌと協力するなどして領内の修道院改革を行っており、アスノン修道院の再建もそうした政策の延長線上に捉えることができるのだが、『アスノン修道院史』は、そうした背景さえも描いていない。D. Nicholas, *op.cit.*, p.48 ; S. Vanderputten, *Monastic Reform as Process : Realities and Representations in Medieval Flanders 900-1100*, Ithaca, 2013, p.163.

(19) *Tomelli Historia*, p.153. なお、引用文中の括弧内の言葉は、論文作成上の便宜的な補足であり、以下も同様とする。

(20) *Gallia christiana, in provincias ecclesiasticas distribute: qua series et historia archiepiscoporum, episcoporum et abbatum Francie vicinarumque ditionum ab origine ecclesiarum ab nostra tempora deducitur, et probatur ex authenticis instrumentis ad calcem appositis*, tom.3, 1725, instr., cols.82-84.

(21) 11世紀のフランドルではフェーデが頻繁に行われていた。G. G. Koziol, 'Monks, Feuds, and the Making of Peace in Eleventh-Century Flanders', in *The Peace of God : Social Violence and Religious Response*, ed. Th. Head and R. Landes, Ithaca, 1992, pp.239-259.

戦闘があったのはおそらく事実であり、これと修道院の再建が物語の中で結び付けられることになった。すなわちアスノンの反抗的な城主の排除とアスノン修道院再建を、ともに「聖人からの指示」とすることで、両者を一体化し、前者を後者の達成に至るための過程として描いているのだ。このように『アスノン修道院史』の内容からは、伯家が自らの政治・軍事活動を「聖なるもの」によって飾り、これを修道院にまつわる記憶として組み込もうという意図が明瞭に透けて見えるのである。

そしてこの一連の再建の経緯の最後を締め括るものとして行われたのが、修道院の奉獻式であった。『アスノン修道院史』は、この奉獻式のことを、「啓示により、これらの聖人たちから受け取ったことを、この聖人たちの祝祭において完成させるため」の場であると説明している⁽²²⁾。すなわち、アスノン修道院の奉獻式は、ボードワン・ド・モンスの幻視に始まる語り成就される場として位置付けられている。この幻視譚が修道院の公式の歴史として採用されていることも考慮に入れると、この物語が奉獻式の場で何らかの形で周知された可能性も高いだろう⁽²³⁾。アスノン修道院は、伯による反抗的な城主鎮圧の記憶を具現化するモニュメントであり、その奉獻式は、諸侯による秩序回復を祝福する場としても機能することが期待されていたと考えられる。

では、こうして挙行された奉獻式はどのようなものであったのだろうか。

3 奉獻式の主催者と参列者

実際にその場に居合わせた人間について検討してみよう。『アスノン修道院史』は、この奉獻式を以下のように伝えている。

「彼（ボードワン・ド・モンス）は、この業務（修道院の奉獻）の成就のために6月3日（に式を行うこと）を宣言した。というのもこの日は、聖マルセリヌスと聖ペトルスの祝日（6月2日）の翌日であるからで、そうすることで奉獻式の日を前述の殉教者たちの祝祭日に続かしめ、この二重の祝祭（festum duplicatum）によってこの地の喜びを、民衆のために増大せしめようとした。...そしてこの聖遺物の移送と奉獻式には、...カンブレ司教リエトベルトゥスと、ノワイヨン司教ラドボドゥス、オルレアン司教ライネルスを招待客として立ち合わせた。そして彼らに、ひじょうに多くの修道院長たちが、ひじょうに多くの聖人の加護とともに加わった⁽²⁴⁾...」。

(22) *Tomelli Historia*, p.157.

(23) たとえば、アンジュー伯ジョフロワ・ル・ベルは、反抗的な城主を捕縛した後に、サントーバン修道院の修道院長や修道士らの前で、自らが聖アルビヌスの幻視に従って行動したことを語って聞かせている。*Historia Gaufredi ducis Normannorum et comitis Andegavorum*, dans *Chroniques des comtes d'Anjou et des seigneurs d'Amboise*, publié par L. Halphen et R. Poupardin, Paris, 1913, pp.172-231.

(24) *Tomelli Historia*, p.157.

当然ともいえるが、奉献式そのものについても、主催者としての伯の強力なイニシアティブがうかがえる。『アスノン修道院史』も、『聖ドナティアヌスの奇跡について』も、アスノン版『シジュベールの年代記』も、どれもこの奉献式の主導者として伯以外の人物を記していない。三人の司教の名前は挙がっているが、彼らはいくまでも奉献式を行うために招かれたのであって、奉献式の開催に至るまで彼らの名前が言及されることはない⁽²⁵⁾。修道院長たちについても同様で、そもそも『アスノン修道院史』は彼らの名前さえ挙げていない。

『聖ドナティアヌスの奇跡について』は、その題の通り、この奉献式において聖ドナティアヌスが奇跡を起こしたと記しているのだが、その記述の最後は次のようにまとめられている。

「この幸福の絶頂にあって、輝ける奇跡の噂が誉ある辺境伯（フランドル伯）の耳に届き、彼——すなわち最も力強い支配者であり、最も堅固なる正義の守護者にして最も篤く教えと信仰を愛する者——を、小さからぬ喜びによって満たしたので、彼はすぐさま、最も大いなる喜びによって神の信仰へとたちまちに駆り立てられ… 自らの望むところであるこの祝祭を、自らの出現によって栄光あるものにされたところの神を、その口と心とで称えた⁽²⁶⁾」。

この聖ドナティアヌスの奇跡譚は、噂を聞き付けたフランドル伯が神を称えるところで終わっている。ここでの伯は、最後に登場して物語を締め括る以上の役割は果たさないが、しかしこの場面で伯を登場させていることこそがむしろ重要であろう。というのも、奇跡を確認し、最終的に神を称える行為は、むしろ聖職者に相応しい役回りと言えるが、この奉献式に参加しているはずの数多くの司教や修道院長たちにその役回りは与えられず、他ならぬ伯がこれを務めているからだ。この叙述からは、このアスノン奉献式という場においては、全体を代表して神を賛美する人物として、フランドル伯が相応しいとの認識があったことが透けて見える。この祝祭の主催者がフランドル伯であるということは、シント＝ドナース教会の一行のような参加者にもよく周知されていたといえよう。伯は、参加者たちの目に直接触れる形で、その場の主催者として振る舞っていたと考えられる。

次に式の参列者であるが、先の引用からも分かる通り三人の司教の名が確認できる。前二者については、フランドル近郊の司教が招かれたと考えていいだろう。オルレアンはフランドルから遠いが、ここで言及されている司教ライネルスは、同時代の史料に、しばしば「フランドルのライネリウス（Rainerius Flandrensis）」と表記されており、詳細は不明なものの、フランド

(25) 実は、ボードワン・ド・モンスはアスノンに修道制を導入するにあたってカンブレ司教リエトベルトゥスの助言を請うているが、それにもかかわらず、関連史料でリエトベルトゥスの名前が挙がることはほとんどない。Gallia Christiana, tom.3, instr., col.83. リエトベルトゥスの伝記にも、アスノンのことは言及されない。Rodulphus abbas S. Trudonis, *Vita sancti Lietberti*, PL, tom.146, cols.1449-1484 ; Rodulfus monachus S. Sepulcri Cameracensis, *Vita Lietberti episcopi Cameracensis*, MGH, SS, tom.30, pars II, pp.838-868 ; *Gesta Lietberti Episcopi*, MGH, SS, tom.7, pp.489-497.

(26) AASS, oct., tom.6, pp.505-506.

ルと何らか縁のあった人物のようだ。⁽²⁷⁾『アスノン修道院史』は参加した修道院長の名を一切挙げていないが、アスノン版『シジュベールの年代記』によると、実に17名もの修道院長がこの奉献式に列席している。⁽²⁸⁾その中には、アスノン修道院長ロドランドゥスやサンタマン＝レゾー修道院長ランベルトゥスの名も見える。

『聖ドナティアヌスの奇跡について』は、この奉献式に多くの俗人有力者もまた集められたことを教えてくれる。それによると、この式に際してボードワン・ド・モンスは、「神への隷従において敬虔かつ献身的な者として... 司教、聖堂参事会長、修道院長、そして自らに従う全ての者... を集合させるよう命じ」、かつ「フランドルの全ての有力者に対して、これほどに素晴らしく、これほどに大きな儀式（奉献式）に、友人たちとともに出席するよう命じ」ており、高位聖職者と並んで自らの臣下も大挙して集めていたようだ。⁽²⁹⁾後でより詳しく見ることになるが、このアスノンの事例の5年前にフランドル伯家が行ったリールのサン＝ピエール教会の奉献式でも俗人有力者の参加が確認できる。⁽³⁰⁾

さらに特筆すべき点は民衆の存在である。『アスノン修道院史』によれば、この祝祭は「民衆の喜びを増やすため」に大規模なものとされたとのことであるが、実際に多くの民衆も集まっていたようだ。『聖ドナティアヌスの奇跡について』が、式に参加したシント＝ドナース教会の一行が目にした民衆の様子を伝えてくれている。

「... 我々の父であるドナティアヌスの体を入れた高価な宝物も、貴人の大群に取り巻かれて、うやうやしく前述の場所（アスノン）に運ばれた。多くの労苦とともに、そこに到着したが、その地は大きな困難なしに（聖遺物移送の一団の）全てを収容することはできなかった。というのもそこには、あまりにも多くの何千という民衆が群がり集まっていたからで、すべての人に内心において一つの（同じ）熟慮があり、彼らは（町の）外側で町の近くにテントを張り、そこに聖人たちの遺物を敬う者として、神への隷従において留まっていたのだ。民衆たちは、いたるところで群れをなして聖人たちの遺物のところへ駆けつけ、喜捨と祈りを繰り返し、聖人たちのとりなしによって神が自分たちを赦してくれるよう願っていた...」⁽³¹⁾

一行が、自分たちの居場所を確保するのに苦労しなければならなかったほどに、民衆たちも

(27) たとえば、1080年にフランス王フィリップが発給した証書に「フランドルのライネリウス」と記されている。

Martinus Marrier et Andreas Quercetanus, *Bibliotheca Cluniacensis, in qua SS. Patrum Abb. Clun. vitae, miracula, scripta, statuta, privilegia chronologiaque duplex*, Paris, 1614, col.529; *Gallia christiana*, tom.8, Paris, 1744, col.1439.

(28) 本文中に挙げた二人の他、マルシェヌ修道院長アデルドゥス、オーモン修道院長ウルシオ、カンブレのサンタンドレ修道院長グルデリクス、ドゥナン女子修道院長フレデセンディスなどの名前が挙げられている。*Auctarium Hasnoniense*, pp.441-442.

(29) *Ex Miraculis S. Donatiani*, p.857.

(30) Jacobus Meyerus et Antonius Meyerus, *Commentarii sive annales rerum Flandricarum libri septendecim*, Antwerpen, 1561, fol.26-26v.

(31) *Ex Miraculis S. Donatiani Brugensibus*, p.857.

また、この奉献式に熱狂的に群がっていたのである。「何千」という史料に書かれている数字を鵜呑みにするのは危険だが、いっぽうで『聖ドナティアヌスの奇跡について』の著者が記しているのは、シント＝ドナース教会の一行が、彼らの進行の邪魔になったものとして直接目にした光景についてであり、全体ではそれよりはるかに多くの民衆がいた可能性は高い。アスノンの奉献式は、ひじょうに多くの高位聖職者、有力俗人、そして民衆たちが集まるなか、挙行されたのである。『聖ドナティアヌスの奇跡について』は、この時の式典を「祝祭の誉れの極致」と表現し、「この修道院を神に奉献するために、この地の第二のソロモンと呼ばれるべきボードワンは、その限りなき豊かさから、驚くほどのしつらえを…準備することにした」と記しているが、まさに伯家の威信をかけた大規模なものであったと推測される⁽³²⁾。

これほどまでに民衆が熱狂的に集まった最大の要因は、『聖ドナティアヌスの奇跡について』が記しているように、聖遺物に参詣するためであったろう。では、どのような聖遺物がアスノンの奉献式に“出席”していたのだろうか。

4 アスノンの「聖遺物集合」

(1) アスノンに集められた聖遺物

『アスノン修道院史』は、ただ「ひじょうに多くの聖人」としているだけで具体的なことを記していない。いっぽう『聖ドナティアヌスの奇跡について』は、このように記している。「(ボードワン・ド・モンズは) …彼のこれほどに望むところである祝祭の誉れの極致に、…自らの全支配圏 (totius principatus) の全ての聖遺物を集合させるよう命じた⁽³³⁾」。こちらにも具体的な情報はないが、「自らの全支配圏の全ての聖遺物」とのことで、かなりの多さであったことが想定される。残念ながら、奉献式からほどなく書かれたこの二つの史料には、集められた聖遺物についてこれ以上の情報は出てこない。しかし、アスノン版『シジュベールの年代記』では、以下のように記述されている。

「…この地 (アスノン) は、6月3日に…奉献された。…これは、三人の司教によって行われた。すなわち、カンブレ司教リエトベルトゥス、ノワイヨン司教ラボドゥス、オルレアン司教ライネルスによって。…主の受肉から1070年に。…出席した聖人たち：オーモンの教皇聖マルセルス、テルアンヌの聖アウドマルス、スクランの殉教者聖ピアトゥス、セルの修道士聖ジスレヌス、ヴァランシエンヌの殉教者聖サルウィウス、ソワニエの聖ウィンケンティウス、コンデの聖インノケンティウス、[サントメールの] 修道院長聖ベルティヌス、ドウエの聖アマトゥス、修道院長聖ウィンノクス、ブルッへの聖ドナティアヌス、[ブランダンの] 修道院長聖ワンドレギシルス、アラスの聖ウェダストゥス、[ヘントの] 聖

(32) *Ibid.*, p.857.

(33) *Ibid.*, p.857.

バウォ、[シソワンの] 聖エウエラルドゥス、レゾーの聖アマンドゥス、リールの聖エウベルトゥス、[クレスパンの] 聖ランデリヌス、[アスプルの] 聖ユージュ、[アスプルの] 聖アイカドルス、[マルシェンヌの] 聖リクトウルディス、[マルシェンヌの] 聖エウゼビア、[モブージュの] 聖アルデグンディス、[ドゥナンの] 聖ラゲンフレディス、[ドゥナンの] 聖レギナ、[モンスの] 聖ワルデトウルディス⁽³⁴⁾。

これによると、実に 26 体もの聖遺物がアスノンへ一堂に集められた。この時の祝祭は、「民衆を喜ばせるため」に、聖マルセリヌスと聖ペトルスの祭礼に、アスノンの奉獻式を連日続けて行う「二重の祝祭」にされたとトメルスは記しているが、それだけではなく、ひじょうに多くの聖遺物が並べられていたのである。ブルッへのシント＝ドナース教会から聖ドナティアヌスの聖遺物を運んできた一行が、自分たちの居場所を確保するのに苦労しなければならなかったほどに、民衆たちが熱狂的に群がった理由も納得できよう。

では、ここに集められた聖遺物は民衆を喜ばせるためだけに集められたのであろうか。もちろん、それのみと考えるのは単純にすぎよう。既述の通り、フランドルではしばしば「複数の聖遺物が集められた」とされるものの、その多くについて細かなデータは残されていない。しかし、アスノン同様に「伯領全土から集められた」とされる二つのケースについて、かなり後世の史料からではあるが、集められた聖遺物のリストが再現できる。それらと比較することで、アスノンの奉獻式にこれほど多くの聖遺物が集められた意図を明らかにしていこう。

(2) アウデナールデとリールの「聖遺物集合」

一つ目は、1030 年のアウデナールデの「聖遺物集合」である。これは、ボードワン・ド・モンスの祖父にあたるボードワン・ル・バルビュの主導の下、ノワイヨン司教ユージュと協力して開かれた「平和令集会」の際に行われたもの⁽³⁵⁾だ。ここには伯領内の司教、修道院長、俗人有力者とともに、多くの聖遺物も集められたと記録されている。平和令集会であるからには、アスノンの奉獻式とは、本来的に異なる儀式ではある。しかしこの平和令集会は、フランドル伯ボードワン・ル・バルビュの主導で行われており、少なくとも伯のイニシアティヴの下で領内の聖遺物が集められたという点では比較対象たり得るだろう。

この集会について、12 世紀後半までにはすべての加筆が終わったと考えられている、アフリヘム版『シジュベールの年代記』はこのように書いている。

(34) *Auctarium Hasnoniense*, pp.441-442. 角括弧内の地名は、聖遺物についてのアスノン版『年代記』の記述が『アスノン修道院史』に書き加えられた際に補われたものである。

(35) アウデナールデの平和令集会は、当然のことながら「神の平和」関係の研究でしばしば取り上げられる。たとえば、B. Töpfer, 'Die Anfänge der Treuga Dei in Nordfrankreich', *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 9, 1961, pp.876-893; H. Platelle, 'La violence et ses remèdes en Flandre au XIe siècle', *Sacris Erudiri*, 15, 1971, pp.101-173; Koziol, op.cit., pp.239-259 など。

「1030年。バルビュと呼ばれる伯ボードワンは、自らの伯領(marchisia)の聖人達——バウォ、ワンドレギシルス、アマンドゥス、ウェダストゥス、ベルティヌス、ウィンノクス——の遺物を、他の数え切れない聖遺物とともに集め、ノワイヨン司教ユージュと他の多くの司教や修道院長の出席のもと、自らの王国(regnum)の全ての第一人者をアウデナールデに集め、全ての民(omnis populus)によって宣誓された平和を確たるものと成した⁽³⁶⁾」。

ここで名前の挙げられている6人の聖人以外に「数え切れない聖遺物」が集められたというが、この匿名の年代記加筆者は、それらについての具体的情報を示してはいない。しかし、この不足している情報を補うものが存在している。それは16世紀の歴史家ヤコブス・メイエルスによって書かれた『フランドルの諸事についての年代記あるいは記録 17章』である。ヤコブス・メイエルスは、ブルッヘのシント＝ドナース教会などで司祭を務めた人物だが、複数の歴史書を書き残すなど人文主義者としても知られる。その著作にあたっては、刊行された史料に依拠するだけでなく、⁽³⁷⁾ 諸々の教会の古文書室に入って多くの未刊行の手写本を調査したとされ、その評価は高い。その彼が次のように記している。

「1030年、君侯(princeps)ボードワンによって(開かれた)先述の集会(があり)、この集会では、ノワイヨン司教ユージュが、フランドルの全ての有力者とともに(いた)。同じく、聖ゲルルフス、聖ワンドレギシルス、聖アンスベルトゥス、聖ウルフランヌス、聖バウォ、聖アマンドゥス、聖ファライルディス、聖ドナティアヌス、聖アメルベルガ、聖ワルブルギス、聖ランドアルドゥス、聖ウィンキアナ、聖ウェダストゥス、聖ベルティヌス、⁽³⁸⁾ 聖ウィンノクスの遺物と、他のフランドルの全ての聖なるもの(sacra)が出席した...」。

メイエルスの記述によって補うなら、アウデナールデには少なくともこれら15体の聖遺物が集められていたことになる。

(36) *Auctarium Affligemense*, MGH, SS, tom.6, pp.398-405. なお、現存する写本は14世紀半ばに書かれた『エルマル年代記』にもほぼ同じ内容の記述があるが、ここでは聖ゲルルフスを加えた七人の聖人の名前が挙げられている。 *Annales Elmarenenses*, dans *Les annales de Saint-Pierre de Gand et de Saint Amand*, publié par Ph. Grierson, Bruxelles, 1937, pp.89-90.

(37) メイエルスについては、A. Bonvarlet, 'Jacques de Meyere, de Flêtre : notice sur sa vie et ses travaux', *Annales du Comité Flamand de France*, 22, 1895, pp.1-81 ; 青山秀紀『記憶の中のベルギー中世：歴史叙述にみる領邦アイデンティティの生成』京都大学学術出版会、2011年、211-230頁。19世紀の歴史家で、ルーヴァン大学の教授やベルギー王立図書館長を務めたフレデリック・ド・レイフェンバールはメイエルスを「ベルギーの最良の歴史家」と呼んでいる。Le Baron de Reiffenberg (Frédéric de Reiffenberg), *Chronique rimée de Philippe Mouskes*, tom. I, 1836, pp. CCCXLV-CCCXLVII.

(38) J. Meyerus et A. Meyerus, *op.cit.*, fol.23.

次に比較対象となるのが、⁽³⁹⁾1065年に行われた、リールのサン＝ピエール教会の奉献式での「聖遺物集合」である。この奉献式については、これを記録したサン＝ピエール教会の証書が現存しており、式そのものがあつたことははっきりと確認できる。⁽⁴⁰⁾しかしこの証書には「聖遺物集合」についての言及は一切ない。この奉献式には各地の司教やフランス王なども招かれていたようであり、やはり大規模なものであつたようだが、残念ながら証書の記述はきわめて簡潔なので、式の様子を細かくうかがうことはできない。

この奉献式については、時代を下って12世紀後半、おそらくは1164年からそう経たない頃にサン＝ベルタンの修道士によって書かれた叙述史料『フランドリア・ゲネローサ』が次のように語っている。

「…この（フランドル伯）ボードワン（ド・リール）は、リールに城と使徒聖ペテロの教会を建て、そしてそこに葬られ、その良き徳のゆえに裁きの日を期待して待っている。前述の教会の奉献式のために、（ボードワン・ド・リールは）自身の伯領全土（*totus comitatus*）からすべての聖人（*omnes sancti*）を運んでくるよう願って指示し、そしてそれらの聖人に地所を…永遠に所有されるべきものとして与えた」⁽⁴¹⁾。

参事会教会と修道院という違いはあるものの、奉献式という点でもアスノンの事例と共通している。1070年にアスノンの奉献式を行ったボードワン・ド・モンズからすれば、実父が行ったまさに直前の先例といえるだろう。

『フランドリア・ゲネローサ』も、この時集められた聖遺物の具体的な情報を伝えてはいないが、16～17世紀に生きたイエズス会士ジャン・ビュズランが、その著書『俗にして聖なるガロ＝フランドリア』の中で次のように記している。

「敬虔な（ル・ピュー）」及び「リールの（ド・リール）」というあだ名で呼ばれるフランドル伯ボードワンは、リールの祝福されたペテロの聖堂を神に奉献することを熱望していた。そのため…全ての聖遺物をリールに運んでくるようにと彼らに命じた。…決められた日に、サントメールから聖アウドマルスと聖ベルティヌスの聖遺物が運ばれた；アラスから祝福されたウェダストゥスの（聖遺物が）；ベルグから聖ウィンノクスの；ブルッヘから祝福されたドナティアヌスの；ヘントから聖パウオの；ドウエから祝福されたアマトゥスとマウロントゥスの；スクランから聖ピアトゥスと聖エウベルトゥスの；マルシェンヌ

(39) リールの奉献式が開催された年については、史料によって揺れがある。証書と『フランドリア・ゲネローサ』は1065年としているが、『ガリア・クリスティアナ』はベルグ・サン＝ヴィノックの記録から1063年、メイエルスは1066年としている。ここでは1065年を取る。*Cartulaire de l'église de collégiale de Saint-Pierre de Lille*, publié par E. Hautcœur, tom.1, Lille/Paris, 1894, p.1 ; *Francia Generosa*, MGH, SS, tom.9, p.319 ; *Gallia christiana*, tom.5, 1731, col.333 ; J. Meyerus et A. Meyerus, *op.cit.*, fol.26-26v.

(40) *Cartulaire de l'église de collégiale de Saint-Pierre de Lille*, p.1.

(41) *Francia Generosa*, p.319.

から聖リクトウルディスと聖エウゼビアの；シソワンから聖エウエラルドゥスの；そして他の聖遺物が各地から（運ばれた）⁽⁴²⁾…」。

ジャン・ビュズランはまったく無名の歴史家とっていいが、18世紀に書かれた低地地方の歴史家批評書⁽⁴³⁾では、「情報源や引用元を頻繁に記し、証書史料を多く挿入するなど、史料の調査を元に著作を行っているが、寓話的なものもそのまま記すなど、先行する史料を信じてそのまま記載してしまう」がゆえに歴史家としてやや問題があるとして批判されている。言い換えるなら、その史料批判能力には疑義が呈されているものの、原史料には忠実な叙述を行っていたようである。ビュズランは、引用した以外にも詳細な情報を記しており、現存していない何らかの史料に基づいて記述した可能性が高いと考えられる。⁽⁴⁴⁾

(3) 三つの「聖遺物集合」の比較

まず、アウデナールデ、リール、アスノンのすべてのケースに共通して登場している聖遺物が目を引く（表参照）。ヘントの聖バウオ、サントメールの聖ベルティヌス、ブルッへの聖ドナティアヌス、ベルグ・サン＝ヴィノックの聖ウィンノクス、アラスの聖ウエダストゥスの5体である。これらは、それぞれの地に安置されるに至った移送にフランドル伯家が関わっているなど、その関係性がもともととくに深い聖人たちである。また、それぞれが置かれている教会施設や都市も、かつて歴代の伯が俗人修道院長に就いていたところであったり、伯家の墓所が所在していたりと、とりわけ縁が深く、本拠地的な役割を果たしていたところである。⁽⁴⁵⁾⁽⁴⁶⁾

(42) Jean Buzelin, *Gallo-Flandria sacra et profana, in qua urbes, oppida, regiunculae, municipia, et pagi praecipui Gallo-Flandrici tractus describuntur ; horumque omnium locorum antiquitates, religio, mores, sacra aedificia, piae foundationes, principes, gubernatores, et magistratus proponuntur dein annales Gallo-Flandriae*, lib.II, Douai, 1625, p.269.

(43) *Mémoires pour servir à l'histoire littéraire des dix-sept provinces des Pays-Bas, de la principauté de Liege, et de quelques contrées voisines*, publiées par l'Imprimerie Academique, tom.2, Louvain, 1763, p.418-420.

(44) 奉献を行った司教の名など。

(45) 聖バウオの聖遺物は、940年にアルヌール・ル・グランが獲得してヘントに移送し、その修道院を再建した。*Annales Gandenses*, MGH, SS, tom.2, p.188. 聖ウィンノクスの聖遺物は、900年にボードワン・ル・ショーヴが獲得してベルグ・サン＝ヴィノックに移送し、教会を建設した。*Ex Vita Winnoci*, MGH, SS, tom.15, pars II, pp.776-777. 聖ドナティアヌスの聖遺物は、ボードワン・ブラ・ド・フェルが取得してこれをブルッへに置き、950年頃にアルヌール・ル・グランがそこに大規模な教会を建てた。*Flandria Generosa*, p.318 ; Ch. Mériaux, *Gallia irradiate : Saints et sanctuaires dans le nord de la Gaule du haut Moyen Âge*, Stuttgart, 2006, p.259. 聖ベルティヌスの聖遺物が置かれたサン＝ベルタン修道院はかつてフランドル伯が俗人修道院長を務めていた。*Collection des cartulaires de France 3: Cartulaire de l'abbaye de Saint-Bertin*, tom.3, publié par M. Guérard, Paris, 1840; *Gesta abbatum S. Bertini Sithiensium*, MGH, SS, tom.13, pp.600-673. 聖ウエダストゥスの聖遺物が置かれたアラスのサン＝ヴァ修道院は、932年にアルヌール・ル・グランが掌握している。*Annales S. Martini Tornacensis*, MGH, SS, tom.15, pars II, p.1296 ; *Les annales de Saint-Pierre de Gand et de Saint-Amand*, p.17. 11世紀初頭のサン＝ヴァ修道院長リシャール・ド・サン＝ヴァンヌとフランドル伯家は修道院改革について密接な協力関係を結んでいた。D. Nicholas, *op.cit.*, p.48.

(46) サン＝ベルタンとヘントにはそれぞれ伯家の墓所がある。ただし、ヘントで墓所が置かれているのはシント＝バーフ（聖バウオ）修道院ではなく、これと競合関係にある同市のシント＝ピーテル修道院である。青谷秀紀、前掲書、70-75頁。

表 アスノン（1070年）、アウデナールデ（1030年）、リール（1065年）に集められた聖人たち

集められた聖人名	本来の所蔵場所	集められたか否か		
		アウデナールデ	リール	アスノン
聖アマンドゥス	サンタマン＝レゾー	○	×	○
聖パウオ	ヘント	○	○	○
聖ベルティヌス	サントメール	○	○	○
聖ドナティアヌス	ブルッヘ	○	○	○
聖ウィンノクス	ベルグ・サン＝ヴィノック	○	○	○
聖ウェダストゥス	アラス	○	○	○
聖ワンドレギシルス	ヘント	○	×	○
聖アメルベルガ	ヘント	○	×	×
聖アンスベルトゥス	ヘント	○	×	×
聖ゲルルフス	ヘント（ドロンゲン）	○	×	×
聖ファライルディス	ヘント	○	×	×
聖ランドアルドゥス	ヘント	○	×	×
聖ウィンキアナ	ヘント	○	×	×
聖ウルフランヌス	ヘント	○	×	×
聖ワルブルギス	フールネ	○	×	×
聖アマトゥス	ドゥエ	×	○	○
聖エウエラルドゥス	シソワン	×	○	○
聖エウベルトゥス	スクラン	×	○	○
聖エウゼビア	マルシェンヌ	×	○	○
聖マウロントゥス	ドゥエ	×	○	○
聖ビアトゥス	スクラン	×	○	○
聖リクトゥルディス	マルシェンヌ	×	○	○
聖アウドマルス	サントメール	×	×	○
聖アルデグンディス	モブージュ	×	×	○
聖アイカドルス	アスブル	×	×	○
聖ギスレヌス	サン＝ギスラン	×	×	○
聖フゴ	アスブル	×	×	○
聖インノケンティウス	コンデ・シュル・レスコー	×	×	○
聖ランデリヌス	クレスパン	×	×	○
聖マルセルス	オーモン	×	×	○
聖ラゲンフレディス	ドゥナン	×	×	○
聖レギナ	ドゥナン	×	×	○
聖サルウィウス	ヴァランシエンヌ	×	×	○
聖ウィンケンティウス	ソワニエ	×	×	○
聖ワルデトゥルディス	モンズ	×	×	○

伯家ととくに結びつきの強い聖遺物が、「聖遺物集合」の度に集められたとみなせよう。アウデナールデとアスノンの双方に“出席”した、ヘントの聖ワンドレギシルスとサンタマン＝レゾーの聖アマンドゥスもこれらに準じるものとみなせる⁽⁴⁷⁾。

次にそれ以外の聖遺物に注目してみよう。アウデナールデでは、聖アメルベルガ、聖アンズベルトゥスなどの8体がそれに当たるが、聖ワルブルギスを除いて、これらは全てヘントから移送されている⁽⁴⁸⁾。聖バウォと聖ワンドレギシルスも含めれば、実に15体中、9体もの聖遺物がヘントから移送されたことになる。すなわち、集められた聖遺物の数こそ多いものの、大半は同じ都市から運ばれていたのである。ヘントからこれほど多くの聖遺物が運ばれたのは、これが伯家の本拠地ともいえる都市の一つであり、なおかつ相対的にアウデナールデに近いからであろう。すなわち、「伯領全土から」と言いつつも、実際に領内の各所から運ばれてきたのは、聖ワルブルギスを別とすれば、⁽⁴⁹⁾伯家ととくに縁の強い5体のみであって、この数の不足を補うかのように、“集合場所”と相対的に近いヘントから多数の聖遺物が運ばれたことになる。

次にリールであるが、ここではヘントから集められた多数の聖遺物は姿を消し、代わりに聖アマトゥス、聖エウエラルドゥスなどの7体が集められた。これら7体の通常の所在地は、ドウエ、シソワン、スクラン、マルシェンヌであり、複数の場所から移送されているのが分かる。しかもこれらはリールの近くに、同市を取り囲むように位置している。すなわち、伯家の本拠地的な都市からわざわざ多数の聖遺物を運び込んだアウデナールデの例とは異なり、リールの周辺から、いわば“地元”の聖遺物が7体も集められたということになる。より在地的な聖遺物が集められているといえるだろう。

この差異はどこから来るのであろうか。まず考慮しなければならないのは、両者の目的の違

(47) 聖ワンドレギシルスの聖遺物は、944年にアルヌール・ル・グランが獲得してヘントに移送した。また、この聖遺物が納められているシント＝ピーテル修道院も同伯が再建している。AASS, feb., tom.2, pp.347-348; *Les annales de Saint-Pierre de Gand et de Saint-Amand*, p.19. アルヌールはしばしば“ブランダン(シント＝ピーテル修道院の別名)の再建者”と呼ばれる。*Genealogia comitum Flandriae*, MGH, SS, tom.9, pp.302-336. 11世紀には、聖アマンドゥスの聖遺物が納められたサンタマン＝レゾー修道院長マルボドゥスとフランドル伯家は修道院改革を巡って協力関係にあった。アスノン修道院に多くの修道士を供給したのも同修道院である。なお、マルボドゥスの前代のサンタマン＝レゾー修道院長はリシャール・ド・サン＝ヴァンヌ。S. Vanderputten, *op.cit.*, p.163. 11世紀中葉には、ボードワン・ド・リールの協力により、聖アマンドゥスの聖遺物がフランス王国内を巡回している。*Acta sanctorum Belgii selecta*, tom.4, éd. J. Ghesquière et C. Smet, Bruxelles, 1787, pp.273-275; *PL*, tom.150, cols. 1435-1440.

(48) 聖アメルベルガの聖遺物は、864年にヘントのシント＝ピーテル修道院に移送されている。P. E. Szarmach, *Writing Women Saints in Anglo-Saxon England*, Toronto, 2013, p.284; AASS, jul., tom.3, pp.70-74. 聖ゲルルプスの聖遺物は、915年にヘント近郊ドロングンに移送された。*Ex Adventu S. Gerulfi*, MGH, SS, tom.15, pars II, p.907. 聖ファライルディスの聖遺物は940年にヘントのシント＝パーフ修道院に移送された。*Annales Gandenses*, MGH, SS, tom.2, p.188. 聖アンズベルトゥスと聖ウルフランヌスの聖遺物は、ともに944年にヘントのシント＝ピーテル修道院に送られた。AASS, feb., tom.2, pp.347-348. 聖ランドアルドゥスと聖ウィンキアナの聖遺物は、ともに980年にヘントのシント＝パーフに移送された。*Sancti Landoaldi et sociorum translatio, adventus, elevatio*, MGH, SS, tom.15, pars II, pp.599-611; *Acta sanctorum Belgii selecta*, tom.3, 1785, p.346.

(49) 聖ワルブルギスの聖遺物は、870年にフランドル伯ボードワン・ブラ・ド・フェルによってフルネに移送されており、これも伯家と縁の強い聖遺物といえる。ただし、その後の「聖遺物集合」ではこれのみ集められておらず、その理由は不明。AASS, feb., tom.3, p.526.

いである。すなわち、アウデナールデの「聖遺物集合」は平和令集会のためであり、いっぽうリールのは、教会の奉獻式のためであった。しかし、それぞれの催事の目的の違いを考えるならば、フランス王や各地の司教を招いて挙行された奉獻式よりも、領内の戦士たちに平和宣誓をなさせることを目的とした平和令集会の方が、むしろ在地的な動機に基づくものといえるだろう。催事の本来の目的という意味では、平和令集会に比べて、奉獻式の方にとくに在地の聖遺物を重視せねばならない理由はないように思われる。

この差異は、むしろ伯家の権威・勢力の浸透という側面から考えるべきである。フランドル伯家は、10世紀のアルヌール・ル・グランの代に、一度最盛期を迎えていた。この時、フランドル伯家の威勢が及んだ地は、南方ではスカルプ河を越え、西方ではテルノワやブーロネなどにも及んでいたと考えられている。しかし、アルヌールの後継者となるはずだったその息子ボードワン・ル・ジューヌは父より早く他界する。このため孫のアルヌール・ル・ジューヌがごく幼少で伯位を継ぐこととなり、その支配圏は急速に解体していった。この伯の代にフランドル伯家は周辺部の勢力圏をことごとく失い、ブルッヘなどを含んだ中核部しか維持できなかったともいわれる。⁽⁵⁰⁾ 11世紀に入ると、精力的なボードワン・ル・バルビュがふたたび家勢を盛り返していくが、アウデナールデの平和令集会は、まだその過渡期といえる。

いっぽうリールの奉獻式は伯家が力を取り戻してからのことであり、実際に権勢の及ぶ範囲が広まったことによって、より在地の聖遺物にも動員をかけられるようになったものと思われる。さらにリールという地が、フランドル伯の所領からすると南方に位置し、どちらかという周辺にあたることを考えると、在地の聖遺物に動員をかけ、それらを実際に動かすことで、リール及びその周辺の地における自家の支配の浸透を印象付けようとしたのであろう。同じように多くの聖遺物を集合させるとしても、ただ数だけを用意するのではなく、それらがもともと置かれていた場所がより細かく配慮され、在地の聖遺物が意図的に選択されるようになっていくのが理解できる。

では、これらを踏まえた上で、アスノンの事例を考察するとどうなるだろうか。まずすぐに気が付く大きな違いは、集められた聖遺物の数の増大である。アウデナールデで15体、リールで12体の聖遺物の移送が伝えられているのに対し、アスノン修道院の奉獻式に集められた聖遺物の数は、実に26体にも及ぶ。もちろん、それぞれの史料に、集められた聖遺物がすべて記載されていない可能性があるが、それでも、前二者が比較的近い数となっているのに対して、アスノンのそれは実にリールの二倍以上である。前二者に比べてかなり大規模であった蓋然性は高いだろう。アスノンでもやはり、ヘントの聖パウオやサントメールの聖ベルティヌスなど、伯家とともに縁の強い聖遺物が集められているが、これらの総数はもちろんとくに変わらない。いっぽう、近隣からリールへと移送された聖アマトゥス以下の6体が、アスノンでもやはり集められている。これは、ドウエやマルシェンヌ、シソワン、スクランといった地が比

(50) この時期のフランドル伯家の動向については、K. Uge, *Creating the Monastic Past in Medieval Flanders*, York, 2005, pp.3-4; D. Nicholas, *op.cit.*, pp.39-45。

較的アスノンとも近いために、引き続き周辺の聖遺物として集められたのだろう。

表を見ればすぐに明らかになることだが、アスノンの奉献式における聖遺物の総数の大幅な増加につながったのは、これまでアウデナルデヤリールでは名の挙がらなかった聖遺物がひじょうに多く集められたからである。すなわち、聖アウドマルス、聖アルデゲンディス、聖アイカドルス、聖ギスレヌスなどの13体である。これらだけで全体のちょうど半分にあたり、まさにこれらによって、集められた聖遺物の数が倍増していることが分かる。しかもこれらが本来配置されている地は、これまでに比べてかなり南方に位置しているのだ。もともとフランドル伯家は、ヘントやサントメールなど北海側が地盤であり、そこから南へと勢力を伸ばしてきた経緯がある。このため、伯家と関係性の強い聖遺物も伯領北部に安置されているものが多く、アウデナルデの例ではそれらの地域から多数の聖遺物が集められていた。しかし、その後のリール、アスノンと続く聖遺物リストの変遷からは、より南方へと、聖遺物を動員する地が広がっていることが確認できる。これは伯家の権威・権限の拡大と符合している。

しかしそれにしても、なぜこれほどまでに増えたのであろうか。ここでもやはり、これらの聖遺物がもともと置かれていた場所が重要となる。すなわち、サントメールから移送されてきた聖アウドマルスを除く12体は、実はすべて、本来のフランドル伯領ではなく、南隣するエノー伯領から運ばれてきたと考えられるのだ。⁽⁵¹⁾ ボードワン・ド・モンスは、その通称に含まれる「モンズ」という地名が示すように、エノー伯も兼ねていた。エノー伯家とフランドル伯家は、本来別の家系であり、11世紀前半のエノー伯レニエ5世は、フランドル伯ボードワン・ル・バルビュと激しく抗争してさえいる。⁽⁵²⁾ 両家が結び付くのは、エノー伯エルマンの寡婦リシルドと、ボードワン・ド・モンズの再婚によってである。⁽⁵³⁾ つまりボードワン・ド・モンスは、このアスノンの奉献式において、自身が新たに獲得したエノー伯領各地の聖遺物を、自らの権威の下で集結させたのである。これらに動員をかけ、実際に動かしたことは、自家の支配の浸透を鮮明に印象付けるとともに、ボードワン・ド・モンスがエノーの正統な支配者であるとの強力

(51) コンデ・シュル・レスコーとクレスパンはフランドル伯領との境界に近いところにあるが、1065年のエノー伯の証書で、これらを含む地の漁業権が差配されていることから、この時期にはエノー側に属していたと考えられる。Ch. Duvivier, 'Quelles étaient l'importance et les limites du Pagus Hainoensis jusqu'au XIe siècle', dans *Mémoires et publications de la société des sciences, des arts et des lettres du Hainaut, années 1863 et 1864*, Mons, 1864, p.411. ヴァランシエンヌは1015年にはフランドル伯家の支配下に置かれたが、1047年にエノー伯に譲渡されている。D. Nicholas, *op. cit.*, p.46; J. Dhondt, *Les origines de la Flandre et de l'Artois*, Arras, 1944, p.73. 11世紀のドゥナンの帰属については不明な点が多い。1025年のドゥナン女子修道院の再建には、フランドル伯に近い人脈が関わっているため、この時期にはフランドル伯の影響が強かったと考えられる。J.-P. Gerzaguët, *L'abbaye féminine de Denain, des origines à la fin du XIIIe siècle : Histoire et chartes*, Brepols, 2008, pp.56-59. しかし、14世紀初に書かれた文書の中に、1069年に皇帝ハインリヒ4世がドゥナンの帰属に関して発給した証書が書写されており、これに基づくなら、アスノンの奉献式が行われた1070年頃には、ドゥナンは帝国側、すなわちエノー伯領側にあった可能性が高い。MGH, *DD, H. IV-I*, p.275; E. Delcambre, 'L'Ostrevant du IXe au XIIIe siècle', *Le Moyen Age*, 28, 1927, pp.256-257. アスプルについてもはっきりとした史料は残っていないが、ドゥナンよりさらに南方であるため、エノーに属したと考えるのが妥当だろう。

(52) J. Dhondt, *op. cit.*, p.61, 70.

(53) D. Nicholas, *op. cit.*, p.51.

なメッセージとなる。

しかしおそらく、アスノンの「聖遺物集合」に込められた意図はそれだけに留まらない。アスノンはフランドル南方の境界域にあり、間近にエノー伯領を臨むところに位置する。その周辺は両伯領がつねに境を接する場であり、角逐の場でもあった。いっぽう、集められた聖遺物の本来の所在地は、北は北海沿いのブルッヘやベルグ・サン＝ヴィノックから、南は現在のベルギー南方を流れるサンプル河沿いのモブージュやオーモンにまで及ぶ。文字通りボードワン・ド・モンスが領する地の隅々から、数多くの聖遺物が、両伯領を接合する場に位置するアスノンに運ばれたのである。この地にフランドルとエノーの聖遺物を平和の内に一堂に集めるということは、両伯領の和合を象徴することになる。この奉獻式が行われた時のアスノンは、それぞれからほぼ半数ずつ集められた聖遺物によって、旧来の支配圏と新たな支配圏とが対等に接合される場になっていたといえる。

このように考えるとき、この奉獻式が多くの人を集める巨大な祝祭であったこともさらに重要な意味を持ってくる。この地に集まった聖職者や俗人有力者、そして民衆たちは、二つの伯領を結ぶ地にいながら、ボードワン・ド・モンスが領する両伯領の各所に安置されていた聖遺物を運んでくる、数々の壮麗な行列を目にすることで、フランドル伯の支配圏を視覚的に再認識したにちがいない。フランドル側に属する者の中には、この壮麗なスペクタクルの内に、エノーにまで及ぶ伯の権威・権力の範囲を、初めて具体的に知る者も多かったのではないだろうか。逆にエノー側に属する者に対しては、北海にまで至る伯の権威・権力を知らしめることになったであろう。民衆たちは、野や河を越えて集められてくる聖遺物の数に、ただただ圧倒されつつ、漠然と東西南北に広がるその広大な所領をイメージしたかもしれない。おそらくこうした強烈なイメージを印象付けることこそが、伯権力がこの巨大な祝祭を主催した意図であったと考えられる。すなわち伯家は、アスノンの奉獻式に、古くからの支配圏と新しい支配圏の聖遺物を集めることで、自らの支配が及ぶ範囲を明瞭にして、壮大なスペクタクルの内に顕示してみせたのである。

おわりに

最後に、アスノンの奉獻式が諸侯による秩序回復を記念する場としても用意されていたことを思い起こしておこう。この修道院の奉獻式は、本来の目的として、聖ペトルスと聖マルセリヌスの加護の下での、伯による反抗的な城主の打倒を祝福するものでもあった。ここにフランドルとエノー全域の聖遺物が集められたということは、聖人たちが伯の要請に基づいてこの式典に“出席”し、その一部始終を見届けたことを意味する。これは、伯に幻視をもたらした二人の聖人だけではなく、両伯領全域の聖人が伯による秩序回復を是認し、祝福し、後援しているというメッセージをも生み出し得る。この奉獻式の場において、伯家は、自らの権力が、支配領域各所を代表する「聖なるもの」によって担保されていることを表明してみせたのである。これは領域全土に及ぶ伯権力の構築を志向する上で、きわめて強力なプロパガンダとなったに

ちがない。

こうした認識は、ただ聖遺物が集められたアスノン周辺のみにて共有されたのではない。各所から来た参加者たちは、そうした認識をそれぞれの地域に持ち帰ったと考えられる。さらに、“出席”した聖遺物もまた、それぞれの本来の安置場所に帰還することで、当該の聖人による伯権力の後援という認識を伝えることになったであろう。ブルッへのシント＝ドナース教会の事例がそうであったように、地元の聖遺物にまつわる記憶として、それぞれの地元において伯家の権威と威光が語られたにちがない。領内全域から聖遺物を収集したアスノンの奉献式は、ただアスノンにおいて伯家の権力の及ぶ範囲を可視化しただけではなく、伯権力が領内全域の聖人の加護を受けているとの認識を、公開の場において目に見える形で表明し、参加者たち（高位聖職者、俗人有力者、参詣に集まった民衆）及び媒介物（各所から集められた聖遺物）を通じて、フランドルとエノーの両伯領全域で、地理的にも階層的にも広くに渡って浸透させることを期待されたと考えられる。これは識字率の低い社会にあってはきわめて効果的なプロパガンダの手段といえる。

中世盛期の諸侯家系は、地理的・社会的に多様な不特定多数の参加者に開かれた儀礼的な場を利用して、自らの権力をこのように表象し、その権威を人々に印象付けていたのである。民衆レベルにも開かれた公開性の高いものを採用した点は、王権の聖別式や入市式に近い戦略といえよう。いっぽうで、王権のそれらが代々定例で行われるものであるのに対して、本稿で扱った奉献式の事例は基本的には任意のものであり、儀礼の恒常化・定式化という点では未発達ともいえる。しかしフランドル伯家の事例にあっても、「聖遺物集合」を利用して、伯位継承の儀礼を定例的に行おうとしていた形跡もうかがえる。⁽⁵⁴⁾こうした研究の進展が今後の課題となるだろう。

(54) 13世紀初に『エノー年代記』を著したサン＝ジェルマン・ド・モンズ聖堂参事会長ジルベール・ド・モンズは、集められた聖遺物が新しい伯への忠誠の宣誓に利用されていたと記している。サン＝ピエール・ド・リール教会の「聖遺物集合」はボードワン・ド・リールの死の2年前、アスノン修道院のそれはボードワン・ド・モンズの死の一か月前に行われており、それぞれ伯位継承の儀式を兼ねていた可能性がある。Gislebertus (Gilbert de Mons), *Chronicon Hanoniense*, ed. W. Arndt, Hannoverae, 1869, p.28. なお、サン＝ピエール・ド・リール教会とアスノン修道院は、それぞれの伯の墓所ともなっており、死後も彼らの権威を顕彰する場たることが期待されていたと考えられる。Lamberti *Genealogia comitum Flandriae*, MGH, SS, tom.9, p.309; *Flandria Generosa*, p.319, 321; *Statistique archéologique du Département du Nord*, 2de partie, Lille/Paris, 1867, pp.425-426.